

審査の結果の要旨

氏名 出井 里佳

本論文は、途上国の村落道路整備事業を対象に、事業の裨益者の生活活動へもたらした影響及びその因果関係を、事例分析を通じて明らかにし、その結果をもとに、貧困削減の形成プロセスへの示唆を得るものである。カンボジア国の完工事業を対象とした事例分析より、村落道路の舗装整備は、所得水準によらず、人々の道路利用頻度を向上させた一方で、道路整備によって達成が期待されていた「経済活動や福祉サービスに対するアクセシビリティの向上」については、経済活動の原資となる土地等の資産を有する世帯や、所得水準の高い世帯に限られることを明らかにした。また、国際機関の融資を受けた世界各国の村落道路整備事業の形成プロセスについて事例比較分析を行い、その結果より、事業目的に個人のアクセシビリティの向上が含まれていても、地域や道路選定の段階で、それに関連する指標が含まれていない事業があることを明らかにした。最後に、これらの結果を総合することにより、途上国における村落道路整備事業の貧困削減効果を促すために必要な要件について考察した。

本論文には、次のような特徴がある。

第一に、最近、持続可能な開発目標(SDGs)が発表され、村落道路改善を通じた途上国の貧困解消に注目が集まる中、その効果を実証的に分析しているという点で、本研究は大変時宜にかなったテーマを取り扱っている。そのため、本研究の成果は、村落道路整備事業および当該事業に関連する各種機関や専門家・実務者に対してタイムリーな示唆を生み出すことが期待できる。

第二に、事例研究において、貧困の多元性を明示的に取り扱っている点に特徴がある。具体的には、「世帯所得の水準及び季節安定性」、「モビリティ（移動ができる自由）」および「教育、医療等公共サービスへのアクセシビリティ」の3つを貧困の構成要素と明確に想定し、貧困への影響に関する多元的な分析を行っている。村落道路事業の貧困削減効果を複数の側面から俯瞰することで、SDGsの達成に向けて新たな知見の提供が可能となっていることから、研究成果には一定程度の新規性が認められる。

第三に、本研究は、カンボジアの村落部を対象とした事例研究において、アンケート調査とインタビュー調査を通じて収集したデータを用い、定量・定性的の両面から多角的に村落道路事業の効果を分析している。定量分析では、複数の計量経済モデルを活用することにより、統計的な仮説検定を行うなど説得力のあるエビデンスを提示しているとともに、丁寧なインタビュー調査を通じて、定量分析では把握できない詳細な要因の抽出や因果関係を定性的にも分析し、これらの知見を統合させている。したがって、分析を通じて得られた結果の信頼性が高い。

第四に、村落道路事業の形成プロセスをレビューする際、複数の国際機関の事例を選び横断的に比較している。このように総括的な知見を得ることにより、将来の村落道路事業設計の形成プロセスにおいて検討を要する事項の提示が可能となっている。また、具体的な国際機関の事例をベースとした分析を行っているため、得られた知見が国際機関の実務に直接的に活用されることが期待でき、有用性が高い。

以上のように、本研究は、時宜性、新規性、信頼性、有用性の観点から見て、十分に高く評価できるものである。したがって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。